

## E. フロムの「神」と「偶像」

—揺籃期の人類による疎外の克服—

### Erich Fromm's "God" and "Idols": the overcoming of alienation by human beings in its infancy

佐藤友梨

Yuri SATO

#### はじめに

「人間の疎外」という問題を考える中で、注目されるものの一つに E. フロムの論説がある。疎外とは、人間が意識的・無意識的に孤独、不安、虚しさのうちに落ち込み、他者や世界との繋がりを見失うと同時に、自己をも喪失してしまうことを意味する。いわば、人間はみずから作り出したものによって逆に支配され、生の意味を奪われて非人間化されている。こういった問題を、政治的・経済的な社会構造と個人的・人間的な心理過程とを結び付けて考察するところにフロムの視点の特徴がある。

フロムが倫理や宗教を論ずる場合、構想の基調となっているのは、人間主義 (humanism) と権威主義 (authoritarianism) との対照である。フロムによれば、権威主義は合理的権威と非合理的権威の2つに分けられる。合理的権威主義は、服従される側からの批判や吟味を許すのみならず要求しさえする。逆に、非合理的権威では、批判や吟味は許されず、力あるものに力なきものが服従することのみが残された道となる<sup>1</sup>。フロムが専ら「権威主義」という言葉を用いる場合は非合理的権威を指している。これに対して、人間主義とは、人間と人間の力に焦点を置く人間中心の立場であり、人間存在より高いものなどは何もないことを意味する。つまり、服従の関係がないのである。

本論文は、フロムの論説における超越者としての神の有無を中心に議論を展開していく。

## 1. 問題提起

### 1-1 神の概念

フロムの神概念もまた、人間主義と権威主義との対照が基本となっている。人間主義とは、人間と人間の力に中心を置き、人間を超越した力ではなく、理性の力・愛の力を最大限の発展にもたらすことが、根本の原理である。人間主義的宗教において、神とは、人間が自らの生活のうちに実現しようと努める人間自身の力の象徴である。成熟した人間は、自らを超えたあらゆる力の偶像 (動物や木像や石像) や、富や

<sup>1</sup> 権威主義については、*The Fear of Freedom*, p.122-153 (日高六郎訳『自由からの逃走』159-197頁)『精神分析と宗教』45-48頁など参照。

成功や専制権力といった今日の偶像崇拜からも解放されている。フロムは神と一つになるところに、人間の成熟の最終段階があるという。

この目標に向かったの最も革新的な定式化はマイスター・エックハルトによって与えられた。「それゆえ、もし私が神となり、神が私をご自身と一つにして下さるなら、そのとき、生ける神によって、神と私の間にはどんな区別もない。……まるで神が向こう側に、そして私たちがこちら側にいるかのように、神を見るだろうと想像している人たちがいるが、それは違う。神と私は一つである。神を知ることにより、私は神を私自身へともたらず。神を愛することによって、私は神の内へと入る」<sup>2</sup>。

逆に、権威主義的宗教における神は、力と権力との象徴を意味する。この宗教の本質的要素は、人間を超越するある力に対する屈服ということである。この型の宗教における主要な美德は服従であり、根本の罪は不服従である。それ故、権威主義的宗教における神に従属することは、フロムの議論において偶像崇拜に当たると考えられる。

これらの基盤にあるのは、精神分析や社会心理学などを採用しながら展開されるフロムの人間観である。

### 1-2 先行研究

本稿では、フロムの人間主義的宗教には超越者としての神が存在しないとした脇本の議論を基に展開する<sup>3</sup>。脇本はフロムの人間主義的宗教に関して肯定しつつも、以下の点について疑問を呈している。超越に直面することのない人間主義が人間の傲慢に陥りはしまいか。また、フロムは偶像崇拜を排撃しながら、逆に人間自身を偶像化してはいないか、という点である。なぜなら、人間主義的宗教の神は結局のところ、人間のより高い自己のイメージであり、人間の可能な姿、すなわち人間がまさになるべき姿の象徴であるからである<sup>4</sup>。

しかし、偶像崇拜を批判しようとしたフロムの思想に超越者としての神が存在しない、というのは矛盾があるのではないか。

### 1-3 方法

脇本によるフロムの人間主義的宗教に対する批判は妥当である。しかし、フロムが倫理や宗教を論ずる場合、構想の基調となっているのは、人間主義と権威主義との対照である、という点が強調され、人類の成長という視点が欠けている。フロムの議論は人類の歴史と個人としての人間の成長の間に、重要な類似点があることを前提としている<sup>5</sup>。が、脇本は、そのことについて十分な議論を行っていない。

上述した神と一つになるという原理にもまた、フロムは個人としての人間の成長との類似から解釈を加えている。

十分成熟した段階では、子供は守ってくれる母親と命令する権威としての父親から自由となり、自分自身のうちに母性原理と父性原理を作り上げる<sup>6</sup>。

<sup>2</sup> *The Art of Loving*, p.63 (鈴木晶訳『愛すること』122頁) 邦訳は適宜変更している。

<sup>3</sup> 脇本平也、1965、「ヒューマンイズムの倫理と宗教—E・フロムの所説について」『理想 (385)』理想社

<sup>4</sup> 脇本、前掲書、20頁。脇本の理解において、フロムの神には何がしかの超越的要素はあっても、それは超越者ではない。あくまでも人間主義的な事柄であり、より高いイメージに向かって前進し、いずれは外的対象から人間の中へ内在化されるべき人間の理想的な姿である。それらに超越的要素を見出すことは可能であっても、人間の理想的な姿は超越者ではない。

<sup>5</sup> *The Art of Loving*, p.50-55, 63-64 (鈴木晶訳『愛すること』102-110頁、122-125頁)

<sup>6</sup> *The Art of Loving*, p.63 (鈴木晶訳『愛すること』122-123頁)

人間は幼少期には「叱られるから」という理由でいたづらを止めるものである。けれども、成長するに従い、自身の中に価値基準を作り上げる。成熟すれば父母の意見に左右されることなく、自己の意思で判断を下していく。外的基準であったものが内在化されるのである。人類と神との関係も同様に、人類の成長段階によって神との関係は変化する。といっても、E.H. エリクソンの発達段階説のように明確な段階を基にはしておらず、定義は曖昧である。が、フロムは常に、人間が揺籃期から自律し成熟することを主張しているため、基本的には、未成熟な揺籃期と成熟期に分かれている<sup>7</sup>。

このような人類と個人としての人間の成長という点に着目し、フロムの論説に超越者としての神が存在する可能性を探っていく。

## 2. 人類の成長

### 2-1 揺籃期

フロムの人間観において人類は未完成である。なぜなら、神が人間を造ったあとで、神はそれを良しとは言っていないからである<sup>8</sup>。つまり、家畜やその他全てのものは、造られたままで完成したが、人間だけは未完成だったという解釈がフロムの人間観の根底にある。そのため、人類は成長し様々な過渡期を経て、成熟する可能性を持っていることがフロムの主張する所である。

『自由であるということ』第三章「人間観」では、特に神に対し反抗する人間が強調される。以下のタルムードの物語は、人間の自律性 (autonomy) をよく表しているとフロムは述べる。

かの日に、[清めの儀式に関する議論の中で] ラビ・エリエザルは考えられるかぎりの論点を持ち出したが、彼以外のラビはそれらを受け入れなかった。(中略)すると、天から声が響いて「すべての事柄についてハラカーはラビ・エリエザルに同意しているのに、何故お前たちは彼に反対するのか」と言った。けれどもラビ・ヨシヤは立ち上がって叫んだ。「あれは天からではない」これはどういう言う意味であるか。ラビ・エレミアは「律法はすでにシナイ山で与えられた。我々は天からの声に耳を傾けない。というのは、シナイ山でくださった律法の中に貴方はずっと前から記されたではないか、人は多数に従わねばならぬ」と答えた。ラビ・ナタンは預言者エリヤに会って「聖にして聖なる御方はその時どうなされたのか」と尋ねた。エリヤは、神は(喜々として)微笑んで「我が息子らが私を打ちまかしました。我が息子らは私を打ちまかしました」と言い給うた、と答えた<sup>9</sup>。

「我が子供たちは私を打ちまかした」と神が微笑みつつ語ったことは、人類が神に対して反抗期に入った

<sup>7</sup> 神や親に対し従順である段階から次第に反抗的になっていく段階を中心に人間観を述べる場合もあれば、人間の発達段階は以下のように3段階に分けている場合もある。まずは、赤子のように無力な為に全てを包み込んでくれる母を求める段階、次に思考と行為を導いてくれる原理としての父親を求める段階、そして父母から独立し、自分自身の中に母性原理と父性原理を作り上げ成熟する段階である。

Cf. *You Shall Be As Gods*, p.63-85 (飯坂良明訳『自由であるということ』85-115頁) *The Art of Loving*, p.63-64 (鈴木晶訳『愛するということ』122-123頁)などを参照。

<sup>8</sup> ハシド派の物語によると、神が良しと言わなかったのは、人間が成長発展する余地を残すために未完成のものとして造られたからだというのである。*You Shall Be As Gods*, p.70, 180 (飯坂良明訳『自由であるということ』94頁、242頁)

<sup>9</sup> Talmud, Baba Meziyah, 59, b. (フロム訳) *You Shall Be As Gods* p.77-78 本来の意図は不明であるが、後にラビ・エリエザルは多数者の法的決定に服さなかったという廉で破門された。本来ラビ・エリエザルを擁護する内容であったと思われるが、フロムは自律の物語へと置き換えた。本論はフロムがこの物語を神からの自律の物語と解釈し引用したという点に注目する。フロムの解釈がヘブライ語聖書の学者やユダヤ教ラビの教えと異なっていることに関しては、以下を参照した。Jan Dietrich, *Erich Fromm in Hebrew Bible Research With a Side Glance at Religious Studies*, in: R. Funk / N. McLaughlin (eds.), *Towards a Human Science: The Relevance of Erich Fromm for Today*, Gießen 2015, p.259-279

事を意味している。この引用の後も、フロムは自律という点から旧約聖書やタルムードの物語を解釈し、神との対立、神へ挑戦する人間、人間の独立を肯定的に捉え論説を展開していく<sup>10</sup>。つまり、フロムが語る人間観は、従順な揺籃期を経て、反抗期から自律へと向かおうとしている人類なのである。フロムの語る神の概念は、成熟した人類が持つ神の概念ではない。人類が揺籃期、もしくは自律を企てようとしたところの神の概念である。

フロムは揺籃期の神概念から人類が独立すべきであることを説いている。

## 2-2 神からの自由

フロムは、人間は神からさえも自由になる可能性を説く<sup>11</sup>。本来、人間の自由というのは神に服従することで、あらゆる権力や束縛から解放されることを意味していた。フロムでさえも、人間の自由という概念が、人間が神からさえも自由であるという究極の結論にまで到達するかについては疑問を呈している。また、一般的に言えば神からの自由には到達しえないこと、律法学者の著作で神は最高の支配者であり律法者であると考えられているために、神からの自由は極めて困難であることが述べられる<sup>12</sup>。

成熟した人類の神概念に関して、フロムは多くを語らない。フロムが中心的に語っていたのは、揺籃期の人類が持つ神の概念であった。これは、フロムが読者として想定していたのが、まだ揺籃期にある大衆であったであろう。

フロムは決して、揺籃期の神概念を否定してはいない。けれども、フロムは1930年代、ナチズムがドイツで大衆の支持を得ていく様を目撃し、1941年に『自由からの逃走』を出版し、教会権力から自由になった大衆がナチズムに傾倒していった心理的メカニズムを明らかにしている。教会権力の衰退により、大衆は新たに従属できる権力を求めていた。そこでナチスが忽ち大衆の支持を得たのである。では、大衆は教会権力に従属していれば、ナチスを支持することもなかったのか。フロムは、『自由からの逃走』において、大衆が教会権力に復帰すべきであるというようなことは提唱していない。大衆が教会権力に戻ったところで、権力はいつか衰退していく。であれば、また新たな権力に従属することの繰り返しとなり、人類が自律することがない限り、人間の歴史はイデオロギーに傾倒することの繰り返しとなる。フロムは、そのような従属の繰り返しを断ち切り自律することを説いた。何らかの権力に従属するのではなく、権力を批判的に捉え、自律して思考することを唱えたのである<sup>13</sup>。

## 2-3 成熟

ここで、フロムの意味する神を揺籃期の神概念のことであると仮定する。例えば、幼児が母親を求めるのは、母親から一方的に何か（愛情や関心、そしてより物質的な要求）を求めている姿であるが、神から一方的に何かを求めている人間も同様に幼稚な状態にあると言えるだろう。しかし、成熟した人間にそのような依存的な関係は不要である。成熟した人間が父母と新たに自律した関係を築くのと同様に、神との関係も、新たな関係に向かって実存的に突き進む方が価値のあることだろう。

フロムの議論において、揺籃期の従属的な神概念からいずれ自律することが重要となる。フロムの念頭

<sup>10</sup> *You Shall Be As Gods* p.79-81 (飯坂良明訳『自由であるということ』107-109頁)

<sup>11</sup> *You Shall Be As Gods* p.24-25, 81-85, 169 (飯坂良明訳『自由であるということ』32、109-115、228頁) 人が神の形に造られたという考えは、神と人の平等という概念や神からの自由へさえも至るだけでなく、各人が自身の内に全人類を含んでいるという人間主義の中心的信条にまで至る。

<sup>12</sup> *You Shall Be As Gods* p.77 (飯坂良明訳『自由であるということ』103-104頁) 正統派ユダヤ教徒の家庭で育ったフロムは、13歳の時に本格的なタルムードの研究を始め、1926年まで正統派ユダヤ教の信仰を持っていた。その後は、正統派ユダヤ教の信仰を捨てたものの、生涯その教義の全般的な影響下にあり続けた。G.P. ナップ『評伝エーリッヒ・フロム』17-18頁。

<sup>13</sup> *The Fear of Freedom*, p.178-206 (日高六郎訳『自由からの逃走』230-263頁)

にあったのは、このような従属的な神概念から人類が自律しなければならないことであった。揺籃期の神概念は、フロムにとって人間主義的宗教における神ではない。なぜなら、それは人間が従属する対象としての神だからである。

以上のことから、揺籃期の神概念は、成長段階によって従属の度合いが強ければ強いほど、権威主義的で権力や力に依存する偶像崇拜と類似する。無論、子供に母親や父親が必要なように、揺籃期の人類には従属する対象としての神が必要であったことが考えられる。しかし、成長した人間が父母と新たに自律した関係を結ぶように、成熟した人類の神概念は自律しており、フロムの議論における偶像の要素を満たしていない。こちらは人間主義的宗教の神である。仮に、こちらに超越者としての神が存在するのであれば、フロムの議論に超越者が存在する可能性が開ける。

### 3. 神と偶像

#### 3-1 神

では、成熟した人類が持つ神概念に超越者としての神は存在するのか。

フロムの人間主義的宗教における神とは「人間がみずからの生活のうちに実現しようとする人間自身の力の象徴」である<sup>14</sup>。生きた具体的な人間の中に基盤を置いており、人間以外のものや力に、その起源を求めることはない。

しかし、ここで注目しなければならないのが、フロムの議論の中心が人類のどの成長段階にあるのか、ということである。

明らかに、大多数の人はその人格の発達において、この幼見的な段階を脱していない。従って、大多数の人にとって、神を信仰するという事は、助けてくれる父親を信じるという子供っぽい幻想なのである。このような宗教概念は、何人かの人類の偉大な教師たちや、ごく少数の人々によって克服されたにも関わらず、未だに宗教の主流をなしている<sup>15</sup>。

フロムにとって、大多数の人類は未だ揺籃期の段階を脱していない。すなわち、ほとんどの人類が神との従属的な関係を望み、自律した関係を求めているのである。フロムは多くの著作の中で、権力に服従し自らの思考を放棄する偶像崇拜を批判している。フロムの議論はアンチイデオロギーに溢れており、始終批判している観が否めない。服従から脱した後の人間、つまり成熟の段階に達した人間がどのようにあるべきか、という点に関して、理想論に留まっており具体性に欠けている。

フロムが読者として想定していたのは、フロムが偶像と呼んでいる専制権力やイデオロギーに縛られていた大衆であったと考えられる。従属から脱し、自律した人間として神と関係を新たに結ぶことを、フロムは繰り返し読者に述べていたのである。神と一つになるところに人間の最終段階がある。幼児が成長して、父性原理と母性原理を自分自身の内に作り上げたとしても、父母は自身と異なる存在として存在するように、神は人間自身の力であると同時に、異なる存在である。つまり、超越者としての神はフロムの人間主義的宗教の内に存在するのではないか。

#### 3-2 偶像

まず、服従の関係における結合がどのようなものであるかを見ていくこととする。

<sup>14</sup> *Psychoanalysis and Religion*, p.45-49 (『精神分析と宗教』 57-62頁)

<sup>15</sup> *The Art of Loving*, p.55 (『愛するということ』 110頁)

共棲的結合 (symbiotic union) の生物学的な形は、妊娠している母親と胎児の関係に見られる。母親と胎児は二人であると同時に一人である。胎児は母親の一部であり、必要なものは全て母親から受け取る。いわば、母親は胎児の全世界である。共棲的結合の受動的な形が服従の関係である<sup>16</sup>。

共棲的結合は、二人でありながら一人であり、一方が一方の一部であるから独立してはいない。服従されることを求める人は、耐え難い孤立感から逃れるために、保護してくれる人物の一部になりきろうとする。服従する対象が、人間であれ神であれ、服従されるものは自分で決定を下す必要がない。しかし、独立しているわけでもない。いわば、彼は個人として完全には生まれていないのである。

宗教の場合は、共棲の対象は偶像と呼ばれる。フロムの思想における偶崇拜像は可視の対象物に対してだけでなく、権力や富に服従することも意味していた。ドイツでナチズムが大衆の支持を獲得していく時代を体験しているため、強力な権力と従属関係を結ぶ人間の心理を、偶像に従属する人間の心理に重ね合わせたのである。

フロムにとって、人間とは理性を授けられているがゆえに、孤独で、自然や社会の前では無力な存在である<sup>17</sup>。孤立しているという意識は、不安 (anxiety) を生む。人間の最も強い欲求とは、この孤立を克服し、孤独の牢獄から抜け出したいという欲求である。克服の一つの方法は、偶像崇拜である。つまり、自分以外のもの、権力や集団に従属することによって、孤独から解放される代わりに、自分自身の個性を放棄することである。権力や富に服従する行為を神ならざるものに従う偶像崇拜と断じることによって、フロムは間接的に超越者を認めている。

### 3-3 逆説

では、共棲的結合とは反対に、一つの存在でありながら異なる存在という逆説は成り立つのか。

共棲的結合とはおよそ対照的に、成熟した愛 (mature love) は、自分の全体性と個性を保ったままでの結合である。愛は、人間の中にある能動的な力である。人を他の人々から隔てている壁をぶち破る力であり、人と人とを結びつける力である。愛によって、人は孤独感・孤立感を克服するが、依然として自分自身のままであり、自分の全体性を失わない。愛においては、二人が一人になり、しかも二人でありつづけるという、逆説が起きる<sup>18</sup>。

これは、成熟した関係において服従の関係は成り立たないことを述べている。自分自身の個性を保ったまま孤立を克服する結合、つまり共棲的結合とは反対の結合こそが理想であり、成熟した人間の選ぶべきあり方であると説くのである。このように、一つの存在でありながら異なる存在とは、偶像崇拜を克服した段階においてのみ成り立つ逆説である。

脇本は、フロムの人間主義的宗教には超越者がいないとした。確かに、フロムの人間主義的宗教における神は超越者としての神ではないように思われる。

それはフロムの議論の中心が揺籃期の神概念からの解放であった為である。フロムの語る人間観はほとんどが揺籃期にある人類である。自律に向かっていこうとする段階は語られるが、成熟した人類については具体的に語らず理想論のまま終わる。人間主義的宗教は成熟し自立した段階の人類であり、フロムの理想とする人類の姿である。フロムがこの段階を語る場合、神と一つになったところの人間について語るた

<sup>16</sup> *The Art of Loving*, p.15-16 (『愛するということ』38-39頁)

<sup>17</sup> *The Art of Loving*, p.6-7 (『愛するということ』23頁)

<sup>18</sup> *The Art of Loving*, p.16 (『愛するということ』40-41頁)

め、それは人間中心的である。そして、異なる存在としての、超越者としての神の存在が希薄となる。それは人類が自律したため、神を象徴的にしか語る必要がなくなったことを意味している。それはあたかも、神の存在が消失し、フロムの人間主義的宗教に超越者としての神は存在しないかのようである。

しかし、一つの存在でありながら二人であり続けるという逆説から、神と一つになった後も、異なる存在として神が存在することが想起できる。神と一つになるということは、神の一部となり、従属することを意味しない。自律し、独立した個性を持った人間と神との関係である。人類は、神に対し批判し吟味することが出来る。人類がそのような成長段階に達することを、フロムは常に提唱している。

以上のことから、人間主義的宗教において、人類が成熟した段階であれば偶像的ではない超越者としての神が存在すると言える。

#### 4. 結び

従来、フロムの人間主義的宗教には超越者としての神は存在しないと言われてきた。

しかし、人類の成長段階という観点から考察していくと、揺籃期の神が権威主義的であり、成熟期の神が人間主義的であることが分かる。また、フロムが提唱しているのは揺籃期の未熟な神概念からの自律であり、成熟した神概念への言及は理想論に留まる。幼児が母親に依存し保護されるように、揺籃期の人類は従属する神が必要であった。けれども、自律した人間が父母と新たな関係を結ぶように、揺籃期から脱した人類は成熟した神観念を持つべきであると説く。成熟した人間が父性原理と母性原理を内在化しているように、成熟した人類は、神と一つとなり、象徴的にしか神について語らなくなる。これは、人間中心的であり、超越者としての神の消失であるように思われる。しかし、成熟した人間は、他者と一つでありながら二人であるという逆説が成り立つ。同様に、神と一つになった人類は、同時に神と異なる存在である。よって、フロムの論説において、超越者としての神が存在する可能性が開けた。

今後の課題として以下のものを挙げる。まず、フロムが語る父母と子供の関係は、象徴としての父母であり、実際の親子関係のことを言っているのではない。どこまでフロムの親子観を神概念の中で生かすことができるのかという検証を行っていない。さらに、宗教とは権威主義と人間主義に分類されるような単純なものではないが、そのような問題への指摘を今回行っていない。

以上のことを踏まえ、今後はさらにフロムの人間主義的宗教における超越者としての神の存在について議論を深めていきたい。

#### 《参考文献》

Fromm, Erich. *The Fear of Freedom*, London: Routledge, 1941 (日高六郎訳『自由からの逃走』東京創元社 1955年)

Fromm, Erich. *Man for Himself*, London: Routledge, 1947 (谷口隆之助・早坂泰次郎訳『人間における自由』東京創元社 1955年)

Fromm, Erich. *Psychoanalysis and Religion*, New Haven: Yale University Press, 1950 (谷口隆之助・早坂泰次郎訳『精神分析と宗教』創元社 1961年)

Fromm, Erich. *The Sane Society*, New York: Henry Holt, 1955 (佐藤勇夫訳『正気の社会』社会思想社 1958年)

Fromm, Erich. *The Art of Loving*, New York: Harper, 1956 (鈴木晶訳『愛するということ』紀伊國屋書店 1991年)

Fromm, Erich. *Beyond the Chains of Illusion*, New York: Continuum, 1962 (阪本健二・志貴春彦訳『疑惑と行動』創元新社 1965年)

Fromm, Erich. *Dogma of Christ*, London: Routledge, 1963 (谷口隆之助訳『革命的人間』創元新社 1965年)

Fromm, Erich. *You Shall Be As Gods*, Greenwich: Fawcett, 1966 (飯坂良明訳『自由であるということ』河出書房新社 2010年)

Fromm, Erich. *The Art of Being*, New York: Continuum, 1993 (小此木啓吾・堀江宗正訳『よりよく生きるということ』第三文明社 2000年)

F. パッペンハイム『近代人の疎外』(粟田賢三訳) 岩波書店 1960年

G.P. ナップ『評伝エーリッヒ・フロム』（滝沢正樹・木下一哉訳）新評論 1994年

安田一郎『フロム』清水書院 1980年

脇本平也「ヒューマニズムの倫理と宗教—E. フロムの所説について」『理想（385）』15-26頁、理想社 1965年